令和2年度

小・義務教育・特別支援学校

若年教員研修1年目　第3回・4回

教科等の学習指導Ⅱ（音楽科）
教科等の学習評価と改善Ⅱ（音楽科）

配布資料

福岡県教育センター

0 1 共創しよう! 教育の未来

Produce from 0 ／ Fukuoka Prefectural Education Center

1　はじめに　…P1

2　学習指導のデザイン　…P1

（１）音楽科学習の前提となる「音楽活動」　…P1

（２）新学習指導要領の改訂の趣旨や要点　…P2

（３）音楽科における題材のデザイン　…P4

（４）児童の実態把握　…P5

（５）楽曲の教材化　…P6

（６）題材における〔共通事項〕の取り扱い　…P7

（７）題材指導計画と資質・能力の関わり　…P8

3　音楽科の授業改善　…P10

4　学習者主体の授業　…P11

5　音楽科の観点別学習状況の評価の観点　…P12

6　観点別学習状況の評価の観点を踏まえた児童の見取り　…P13

7　観点別学習状況の評価の観点を踏まえた評価の具体　…P14

8　観点別学習状況の評価の観点について音楽科における注意点　…P16

9　思考・判断のよりどころを生かした題材のまとまり　…P18

１０　表現の授業改善　…P20

１１　鑑賞の授業改善　…P22

参考資料　…P24

1　はじめに

音楽科学習では、「**楽しい音楽活動**」を設定することと「**育成を目指す資質・能力**」を明確にすることが最も大事です。そのために、児童の実態や教師自身の音楽的力量をしっかりと捉え、学習指導のデザインをしていく必要があります。

【楽しい授業】

音楽活動を伴った学習　＝　音や音楽にふれることは学習の前提

【音楽科の目標】

表現及び鑑賞の活動を通して，音楽的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる**資質・能力**を次のとおり育成することを目指す。

学習によって身に付く資質・能力　←　ねらいが明確になっていること

【学びがいのある授業】

どのように設定？

どう具体化？

目指す資質・能力は明確に！

↓

教師自身の音楽的力量に合わせて手立ての工夫・改善！

「私ならこうする！」

2　学習指導のデザイン

ここでは、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した音楽科学習を充実させようとする際にポイント（必須）となる事項について確認していきましょう。

(1)　音楽科学習の前提となる「音楽活動」

音や音楽で「**はじめる・ひろげる・つなげる・ふかめる**」ような楽しい音楽活動を学習のデザインの中に必ず位置付けましょう。

◇**ポイント**

子供の聴き取りや感じ取りの可視化 音楽活動は「聴く」ことから始まります。口は開いているかどうか見えやすいですが、聴き取れているかどうかはこちらが見取りにくいものです。**音楽の変化→行動の変化**となるような活動を設定するなどの**可視化の工夫**をしましょう。	**子供の実態に沿う活動の設定** 「歌う」「演奏する」「つくる」「聴く」という活動は実は様々な資質･能力を総合的に働かせる大変高度なことです。当然苦手に感じる子供もいることを視野に入れて、「**音楽の苦手そうなあの子**」も楽しめる活動かな？という視点を忘れないようにしましょう。
知識・技能を発揮していることの意味付け 小学校低学年の「楽しい」と高学年の「楽しい」は大きく質が異なってきます。**音楽的な知識や技能を発揮させる**ことについての楽しさを発達段階に合わせて実感させられるよう、その活動にどんな意味や価値があるのかを教師が「音楽を形づくっている要素」を使ってフィードバックしてあげることが大事です。	**音や音楽によるコミュニケーション** 聴き取ったことや感じ取ったことは言葉等で表さなければ自覚・共有しにくいものですが、それだけのコミュニケーションとなってしまっては本末転倒です。**音や音楽によるコミュニケーションを充実させるものとして言葉による活動がある**ことを忘れないようにしましょう。

(2)　新学習指導要領の改訂の趣旨や要点

学習指導のデザインを考えるにあたって、新学習指導要領の改訂の趣旨や要点について押さえておきましょう。

①　学習指導要領の各学年の構成は？

→小学校は中学年が基礎的な内容、中学校は第１学年が基礎的な内容である。

【小学校】

低学年 【素地づくり】	中学年 【基　礎】	高学年 【発　展】

【中学校】

第１学年 【基　礎】	第２・３学年 【発　展】

②　音楽科で目指す資質・能力は？

→端的に言うと、「音や音楽と関わる資質・能力」である。

生活や社会の中の**音や音楽と**豊かに**関わる資質・能力**

(1)知識及び技能、　(2)思考力，判断力，表現力等、　(3)学びに向かう力，人間性等

「音楽的な見方・考え方」を
働かせて学習活動に取り組めるようにする必要がある

学習の前提！！

③　内容の示し方は？

→構成は以前と変更ないが、示し方が３つの資質・能力で整理された。

A 表現　**B 鑑賞**　の２つの領域　と**〔共通事項〕**で構成

歌唱・器楽・音楽づくり
「知識」
「技能」→表現にのみ設定
「思考力，判断力，表現力等」

鑑賞
「知識」
「思考力，判断力，表現力等」

〔共通事項〕
①　音楽を形づくっている要素
「思考力・判断力・表現力等」
②　音符，休符，記号や用語
「知識」

④　「知識」と「技能」の指導内容の違いは？

→知識は理解する（わかる）こと、技能はできることであり明確に異なる資質・能力である。

わかる

知　識

「曲想と音楽の構造との関わり」
を理解することなどの具体的な内容

歌唱　器楽　音楽づくり　鑑賞

できる

技　能

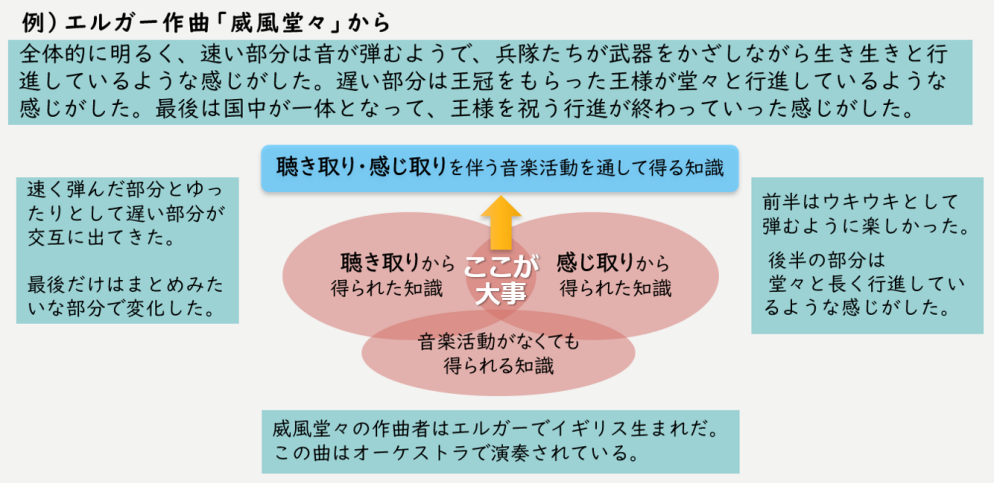
創意工夫を生かした表現などをする
ために必要となる具体的な内容

歌唱　器楽　音楽づくり

明確に異なる！

⑤　音楽科における「知識」とは？

→音や音楽の聴き取り、感じ取りによる実感を伴った理解のこと。



音楽を形づくっている要素などの働きや関わりについて、**実感を伴いながら理解し、**表現や鑑賞などに生かすことができるようにする。

音楽に関する歴史や文化的意義を、表現や鑑賞の活動を通して、**自己との関わりの中で理解**できるようにする。

→「**知識を得たり、生かしたり**」という文言が出てきます。知識は既習の知識と新たに習得した知識等が結び付くことによって再構築されていくものです。このことにより理解が深まっていくということからも、音楽活動による実感を伴った理解はとても大事だということがわかります。

⑥　「音楽的な見方・考え方」とは？

→音楽科学習にはなくてはならないものである。

音楽的な見方・考え方

音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること。

「**音楽の授業での学び**」を

「**音楽科という教科の特質に向かった学び**」とするもの

そもそも、新学習指導要領に示した指導事項は、**音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動によって**習得される内容である。

評価する対象ではなく、**授業改善に生かすために把握する対象**

(3)　音楽科における題材のデザイン

教科等の学習指導Ｉの「学習指導のデザイン」のページでも説明をしていますが、音楽科に掘り下げてポイントとなることを確認しましょう。以下の**①指導のねらい、②児童の実態把握、③指導計画、④教材化、⑤学習を旺盛にする手立て**の五つについて整理していくことが題材をデザインすることとなります。

①　指導のねらい

先生がこの授業で何を教えようか？ではなく、児童が「**音楽科の学習で何ができるようになるか？**」をまず考えましょう。**小学校６年間で、この１年間で、この題材で、この１単位時間で**、とそれぞれスパンは違いますが、これらには当然**つながり**や**まとまり**があるはずです。年間指導計画が絵に描いた餅にならぬよう、長い目で児童を育てていく視野・見通しが大事です。それに基づいて「**何を学ぶか？**」「**どのように学ぶか？**」を考えましょう。これが前提となることで初めて「何を教えるか」という着眼が意味のあるものになります。

→P2 の「２(2)　新学習指導要領の改訂の趣旨や要点　②　音楽科で目指す資質・能力は？」を参照

②　児童の実態把握

①を考える際に、「理想とする目指す児童像」と「現実の児童の実態」とを比較しましょう。ここで児童を見つめる際に「**資質・能力**」の点から実態を見つめることが必要となります。音楽科でも他の教科等と同様に「知識及び技能」、「思考力，判断力，表現力等」、「学びに向かう力，人間性等」の**３つの資質・能力**で整理されていますので、この３つを観点として児童を見つめてみましょう。

→P5 の「(4)　児童の実態把握」を参照

③　学習指導過程

ここでいう「学習指導過程」は、１単位時間の学習をどう進めるかということにとどまらず、「**題材のまとまり**」で考えることが大事です。「**資質・能力**」で児童を見つめるとお分かりかと思いますが、たった１時間の授業で身に付くようなものではありません。題材を通して、１年間を通してといったように、それこそ粘り強く取り組んでいくことで、また全ての教科等の学びを通して育てていくことでじわりじわりと涵養されていくものです。「題材のまとまり」を考えていく上で、大事なことが、その題材で**児童が思考・判断の拠り所とする「音楽を形づくっている要素」を絞る**、ということです。つまり〔共通事項〕を題材においてどう位置付けるのかということをしっかりと検討する必要があります。

→P7 の「(6)　題材における〔共通事項〕の取り扱い」を参照
→P8 の「(7)　題材指導計画と資質・能力の関わり」を参照

④　教材化

音楽科では表現においても鑑賞においても、楽曲を中心とした教材が必要となります。どのような楽曲をどのような視点に基づいて教材としていけばいいのでしょうか。教材化を考える鍵となるのが、やはり〔共通事項〕です。題材のまとまりの中で、どの共通事項を思考・判断のより所とするのか、きちんと焦点化する必要があります。

→P6 の「(5)　楽曲の教材化」を参照

⑤　学習を旺盛にする手立て

手立てについては、「学習課題」、「学習形態」、「指示や発問」、「板書」、充実した「言語活動」等々実に様々な工夫が考えられます。学習者主体の学びをつくっていくために、児童の実態に即した手立てを構想することが大事です。

→詳しくは次回「教科等の学習評価と改善Ⅱ」の講義・演習において扱います。

(4)　児童の実態把握

三つの「資質・能力」で生徒の実態を把握しましょう。具体的には以下のように、音楽科の「目標」に基づいて考えると各資質・能力の違いが分かりやすいと考えます。児童の見取りができるということは**「学習評価」の第一歩**です。観点ごとにどのような資質・能力について見取る必要があるのかを理解しておく必要があります。

○　知識

・曲想と音楽の構造などとの関わりについてどのくらい理解（どのような理解を）しているか？

「構造など」には歌唱における「歌詞の内容」を含んでいますが、歌詞の語句や語彙だけを捉えた知識ではなく、音楽の曲想との関わりについての理解ですので注意しましょう！

○　技能

・思いや意図を表す音楽表現をするために必要な技能をどのくらい（どのように）身に付けていて、それを歌唱・器楽・音楽づくりで表すことができているか？

技能は児童が「こんな表現をしたい」という「思いや意図を」もっていて、それを表現するために必要となっていることが大事です。児童が必要ともしていないのに先生が教え込むということは、児童にとっては必要感のないことをさせられていることになります。つまり、「思考力，判断力，表現力等」との結び付きが強いということですね。

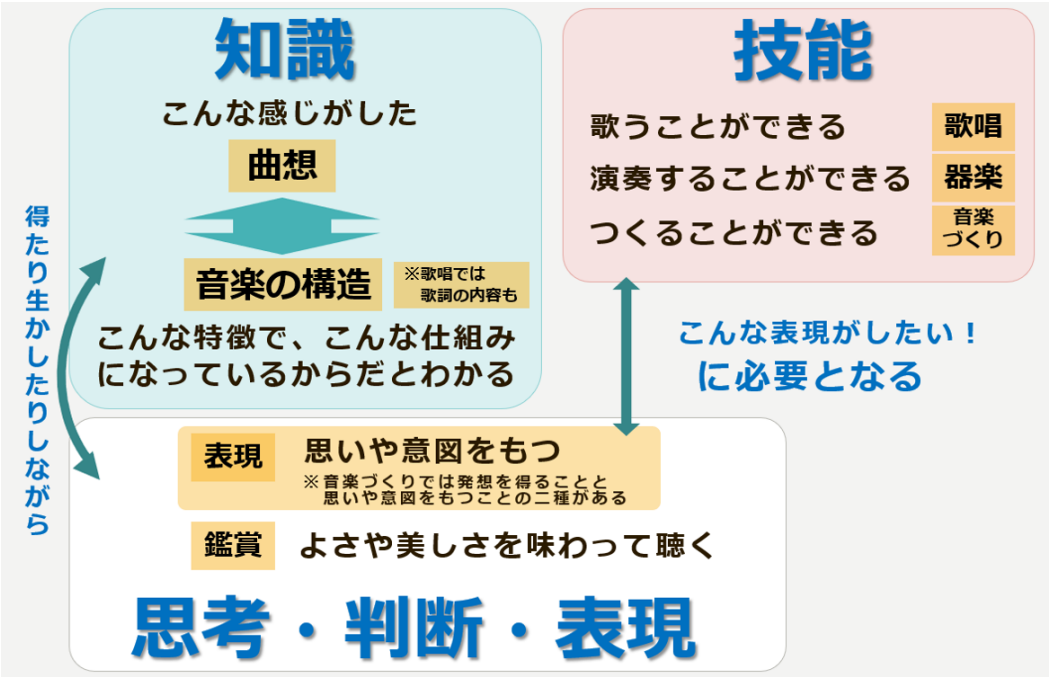
○　思考力，判断力，表現力等

・表現についてはどのような「思いや意図をもつこと」ができているか？

・鑑賞では「よさや美しさを味わって聴く」ことができているか？

ちなみに、「音楽づくり」では、即興的に表現することを通して音楽づくりの発想を得ることと、音を音楽へと構成することを通して、思いや意図をもつこと、の２種類がありますので注意してください。子供が聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えることで、このような思考力，判断力，表現力等は深まっていきます。

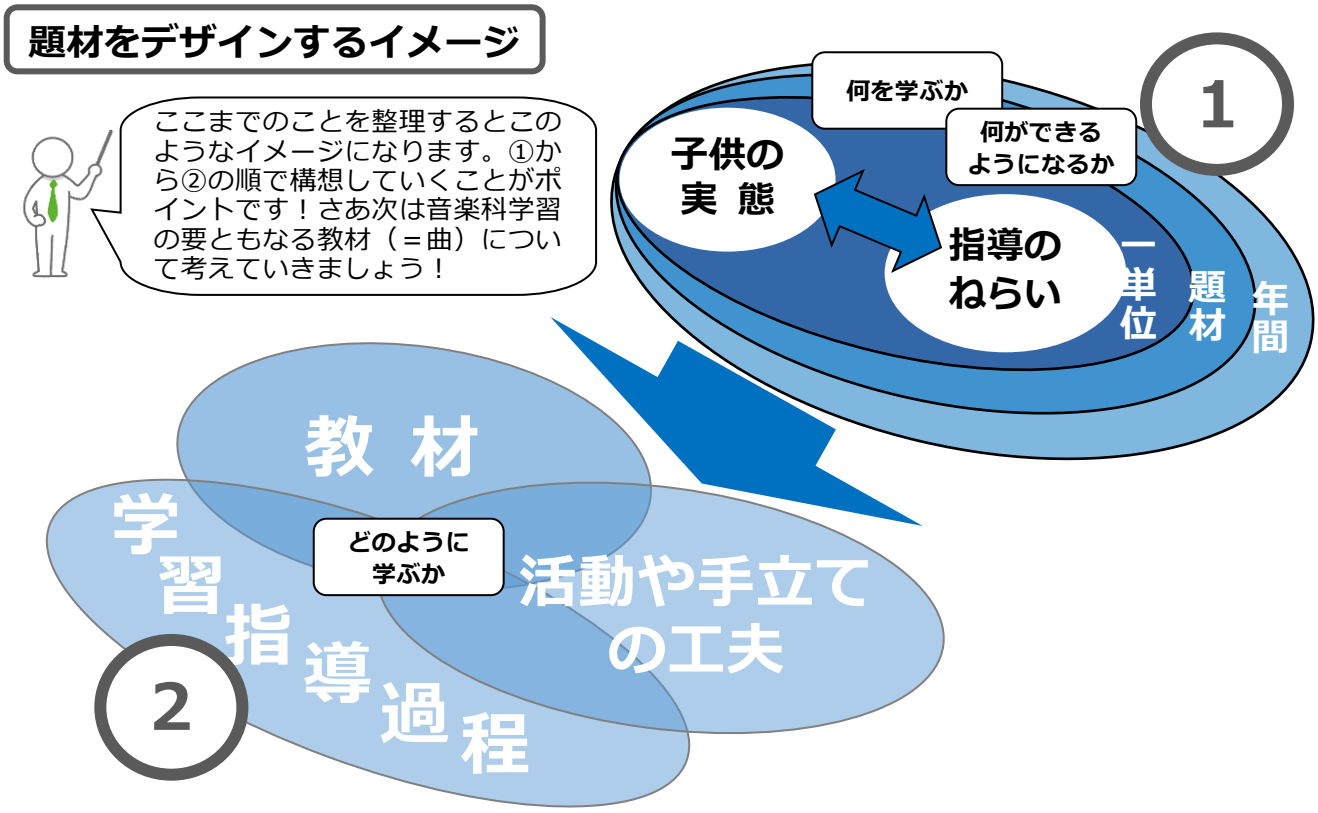
【知識・技能，思考力，判断力，表現力等の見取りのポイント】



○　学びに向かう力，人間性等（評価はその内の「主体的に学習に取り組む態度」）

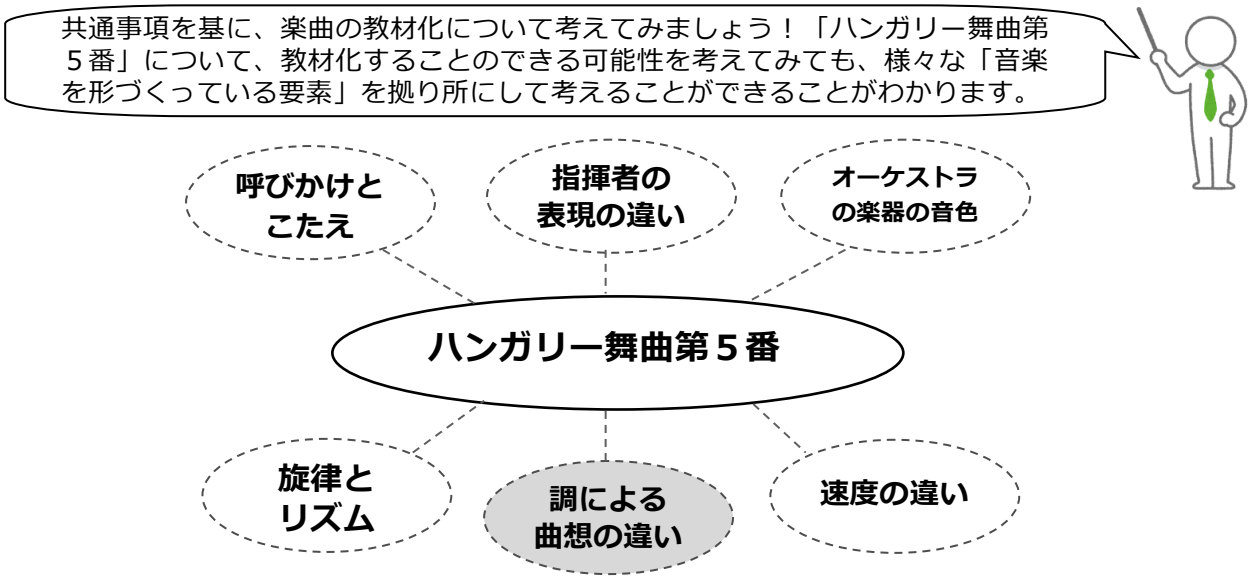
・音や音楽に親しむことができるよう、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしているか？「学びに向かう力，人間性等」の中には「思いやりや感性」などといった観点別学習状況の評価や評定にはなじまないものも含んでいるため、学習を通じて見取ることができる部分についての実態を見つめましょう。

題材をデザインするイメージ



(5)　楽曲の教材化

音楽科では表現においても鑑賞においても、楽曲を中心とした教材が必要となります。どのような楽曲をどのような視点に基づいて教材としていけばいいのでしょうか。小学校第６学年の鑑賞の題材でブラームス作曲の「ハンガリー舞曲第５番」を教材曲として扱おうとする時、どのような切り口が想定されるでしょうか。教科書では「長調と短調の違い」として載っているところがありましたが…。



子供たちも同様に様々な視点（音楽を形づくっている要素）から音楽を鑑賞しようとします。これは表現領域（歌唱・器楽・音楽づくり）においても同様です。様々な音楽を形づくっている要素から表現の工夫をしようと考えるはずです。そんな子供たちの多様な考えをどう整理していけば良いのか難しい！と感じたこともあるかもしれません。

だから、題材をデザインするにあたっては、**思考・判断の拠り所となる「音楽を形づくっている要素」を絞ることが大切**です。はじめは、**この題材でねらう「音楽を形づくっている要素」をどれにするか選択する**というイメージで十分だと思います。

(6)　題材における〔共通事項〕の取り扱い

（５）の教材化の説明にもあったように、〔共通事項〕（＝音楽を形づくっている要素）を絞ることは題材で育成したい資質・能力という点からも、内容のまとまりとして関連していることが必要であることからも大事なポイントととなります。（要は、例えば知識としてはリズムについて取り上げているのに、強弱について思いや意図を試行錯誤しているのは題材として関連がないので違和感がある、といったことです。）

例）題材のまとまりの評価基準　Ａ表現（Ｉ）歌唱の例

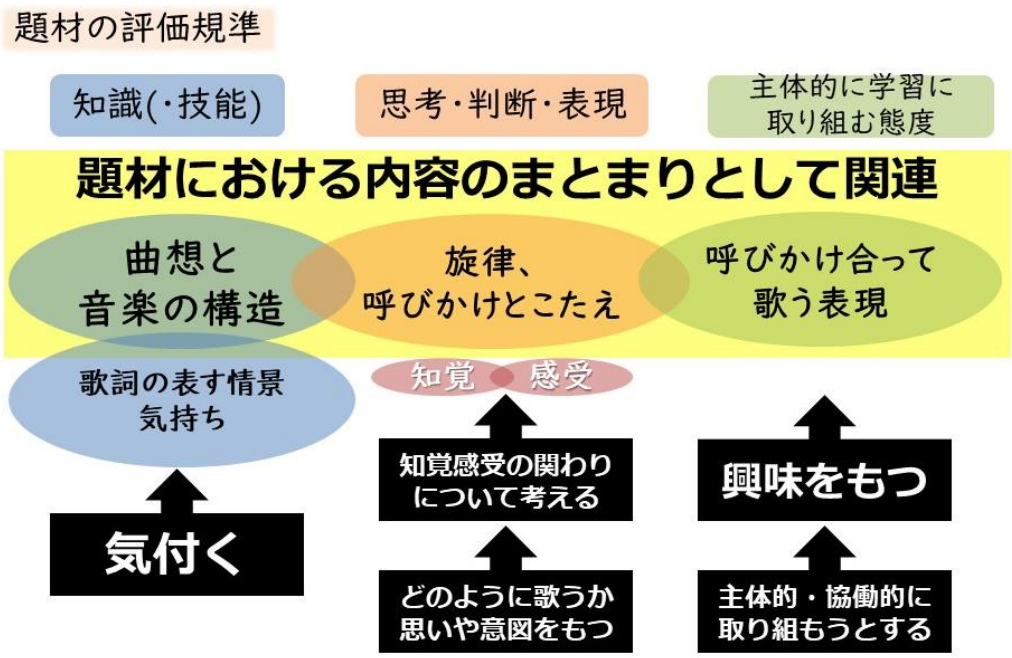
題材における内容のまとまりとして関連していること！

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
＜事項イ（ア），ウ（イ）＞ ・曲想と**音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わり**について気付いている。 ・思いに合った表現をするために必要な、範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能を身に付けて歌っている。	＜事項ア＞ **「旋律、呼びかけとこたえ」**を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもっている。	**呼びかけ合って歌う表現**に興味をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。

思考・判断の拠り所となる主な音楽を形づくっている要素を**適切に選択することができれば、子供たちは、資質・能力をバランスよく伸ばしていくことができますね！**

※「音楽の構造」とは！？
　構造（国語科でいう段落構成のような）のみを詳細に捉えるのではなく、**思考・判断の拠り所として選択した音楽を形づくっている要素**との関わりの中で捉えていくことのできるもののことである

キーワードでまとめると

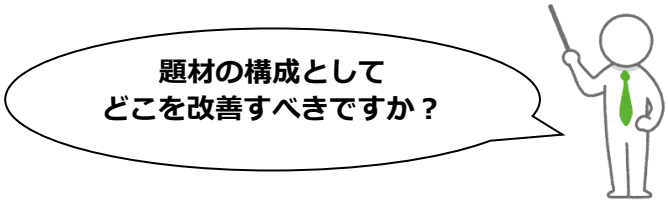


(7)　題材指導計画と資質・能力の関わり

表現の題材のデザインのポイントについて考えてみましょう。６年生が「翼をください」（作詞：山上路夫、作曲・編曲：村井邦彦）の合唱表現を深めていく題材です。

第6学年Ａ表現（Ｉ）歌唱の題材構成の例

次	評価の観点
Ｉ ①	曲や各声部の特徴を曲想の変化に基づいて捉えようとしている。 ＜主体的に学習に取り組む態度＞
2 ②	各声部の歌声や全体の響きを聴いて声を合わせて歌う技能を身に付けている。＜技能＞
3 ③ ④	曲の特徴にふさわしい表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもっている。 ＜思考･判断･表現＞
4 ⑤	音楽活動を楽しみながら、主体的協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。（Ｉ次から継続して） ＜主体的に学習に取り組む態度＞

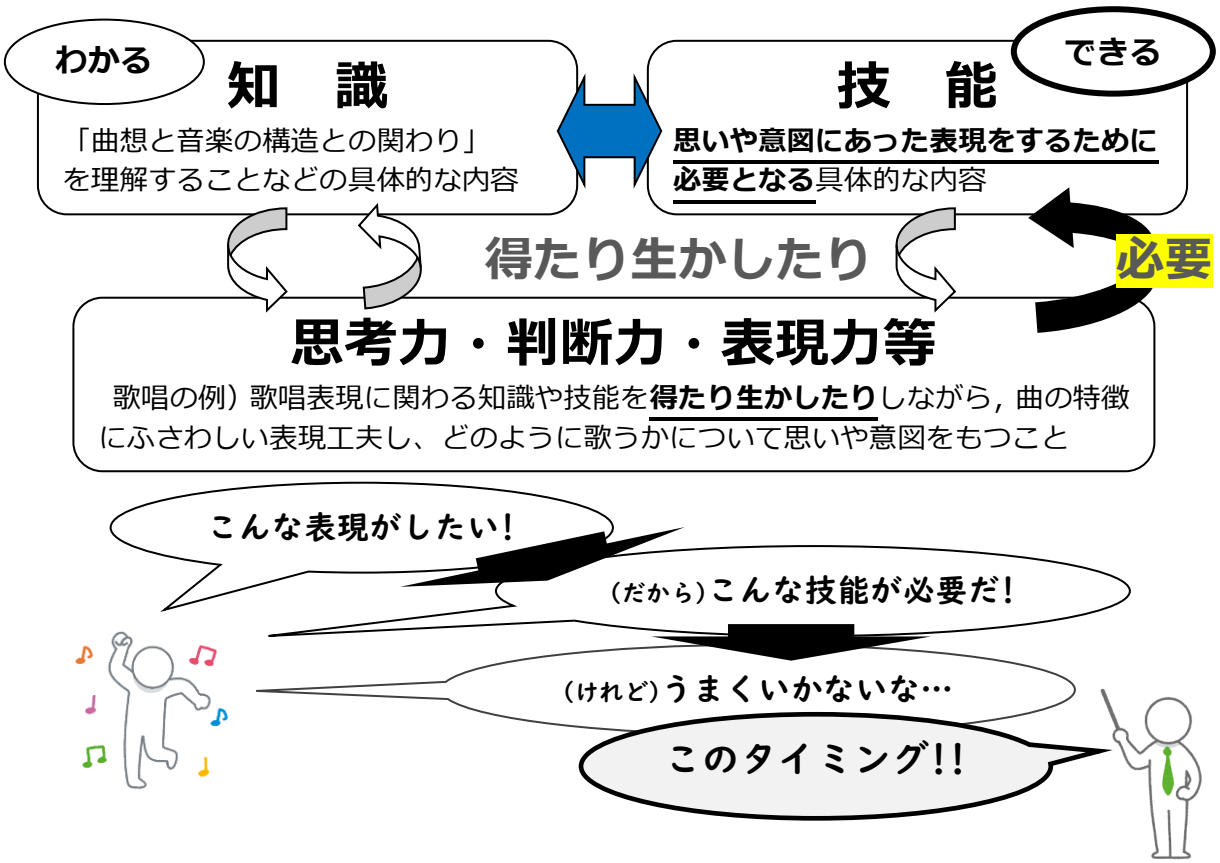


左記のような、合唱の題材があったとき、２次と３次に注目してください。

合唱の授業でありがちな流れと感じるかもしれませんが、「**技能**」はこんな表現がしたいという「**思いや意図**」に基づいて、そのために必要となるもののはずです。そう考えると、しっかりと思いや意図の構築が練られる前に、技能の習得がねらわれた時間が位置付いていることに懸念があります。趣旨からすると２次と３次は逆になっている、もしくは往還的に位置付いていなければなりません。

このように育成したい資質・能力について見つめていくことで、自ずと題材のデザインが決まってくるものです。

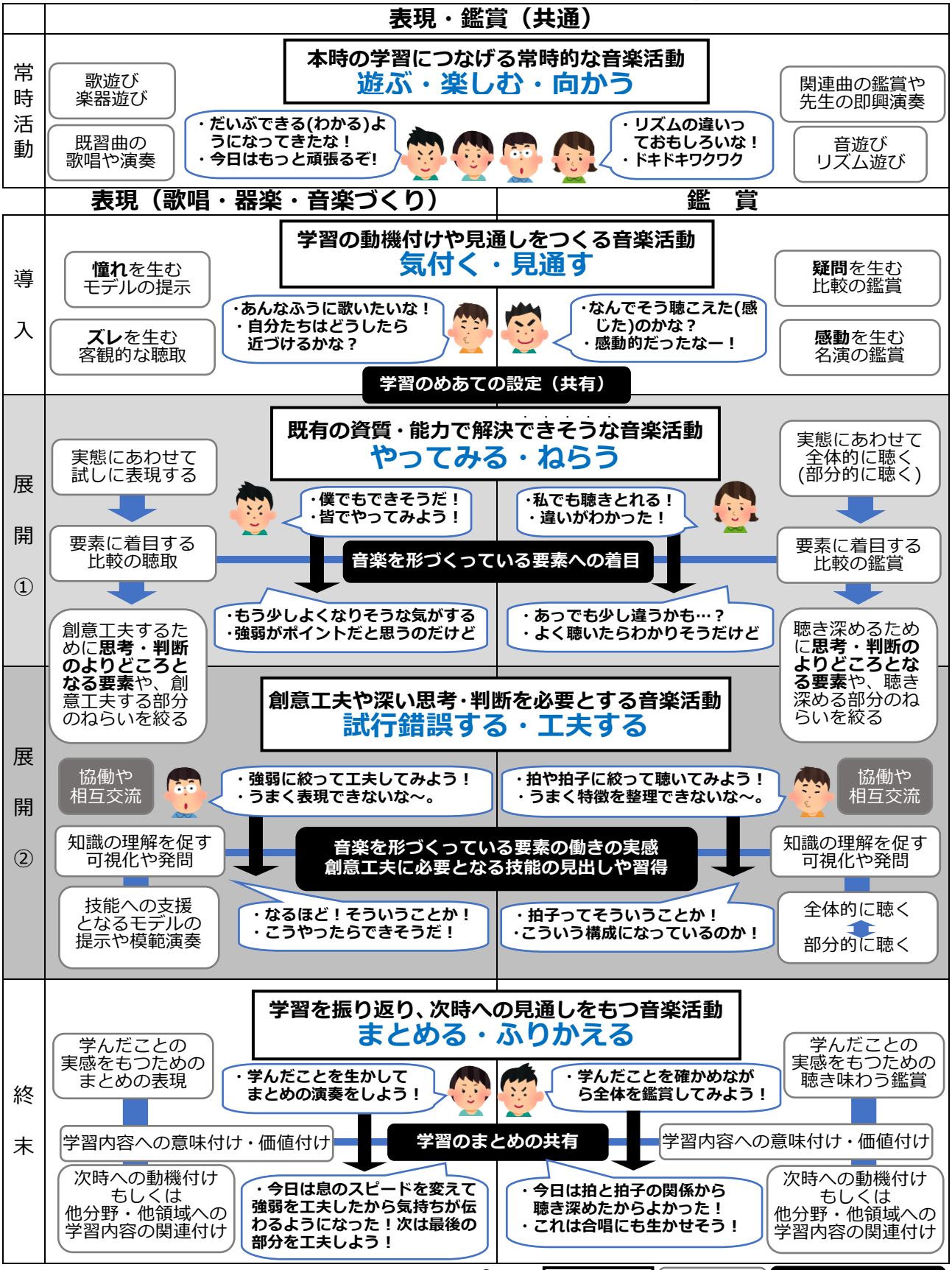
歌唱の題材では「音取り→表現の工夫」という流れも一般的かもしれませんが、表現の工夫を促していく中で、音取りの必要性にも気付かせながら、必要な技能として習得していく流れをデザインしてみると、主体的な学びへと改善されていくと考えます。是非合唱を思いきり取り組めるようになった際にはチャレンジしてみてください。



（８）　１単位時間の学習過程における音楽活動の考え方（例）

基本的な学習過程をシンプルに大きく４つに分けて音楽活動の質の違いを軸に考えるとよいです。

1　導　入　…　音楽に向き合う構えを育成し、学習の見通しをもたせ、めあてを設定(共有)する
2　展開①　…　既有の資質・能力で解決できそうな活動の中で、本時学習内容への気付きを促す手立てをうつ
3　展開②　…　創意工夫や思考・判断を必要とする活動の中で、学習内容の習得や育成を促す手立てをうつ
4　終　末　…　学習のまとめと振り返りを行い、次時（他分野や他領域）への見通しをもたせる



※要素＝音楽を形づくっている要素

3　音楽科の授業改善

○　「よい」音楽科の授業とは？

「よい授業だな」と判断する音楽科の授業とはどのような授業でしょうか。「目標」をよりどころとして考えてみましょう。

【楽しい授業】

音楽活動の伴った学習　＝　音や音楽にふれることは学習の前提

【音楽科の目標】

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して，音楽的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の音や音楽，音楽文化と豊かに関わる**資質・能力**を次のとおり育成することを目指す。

学習によって身に付く資質・能力　→　ねらいが明確になっていること

【学びがいのある授業】

つまり、音楽科の目標を達成するための授業を評価する大きなポイントは「楽しい音楽活動が伴っているか」、「ねらいとした資質・能力が育成されるものであったか」の２点であると考えられます。以下のように、この２点について「学習者の視点で見取る」という視点をもっていると、これまで以上に子供の見取りを意図的・計画的に行っていこうと思うことができます。

1　楽しい音楽活動が伴っていたかな？

2　ねらいとした資質・能力の身に付き（育ち）はどうだったかな？

学習者の視点で見取る

- 思考・判断・表現の拠り所となる〔共通事項〕（音楽を形づくっている要素）がはっきりしている
- 発達段階に合っている
- 音楽的なコミュニケーションを図ることができている
- 音楽を可視化する手立てがある
- 音楽が苦手な児童への配慮がある
- 活動(様相)への価値付けがある

知識・技能

思考・判断・表現

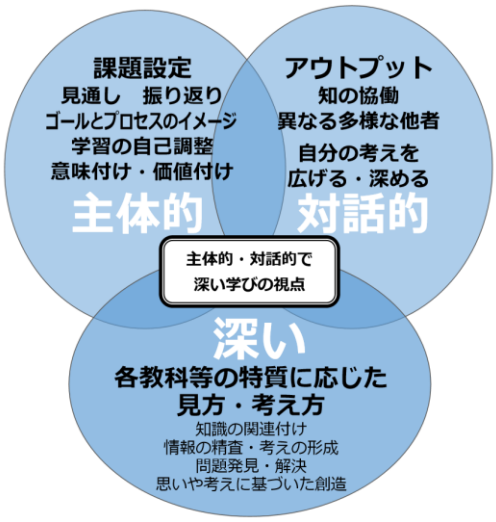
主体的に学習に取り組む態度

学習評価の改善

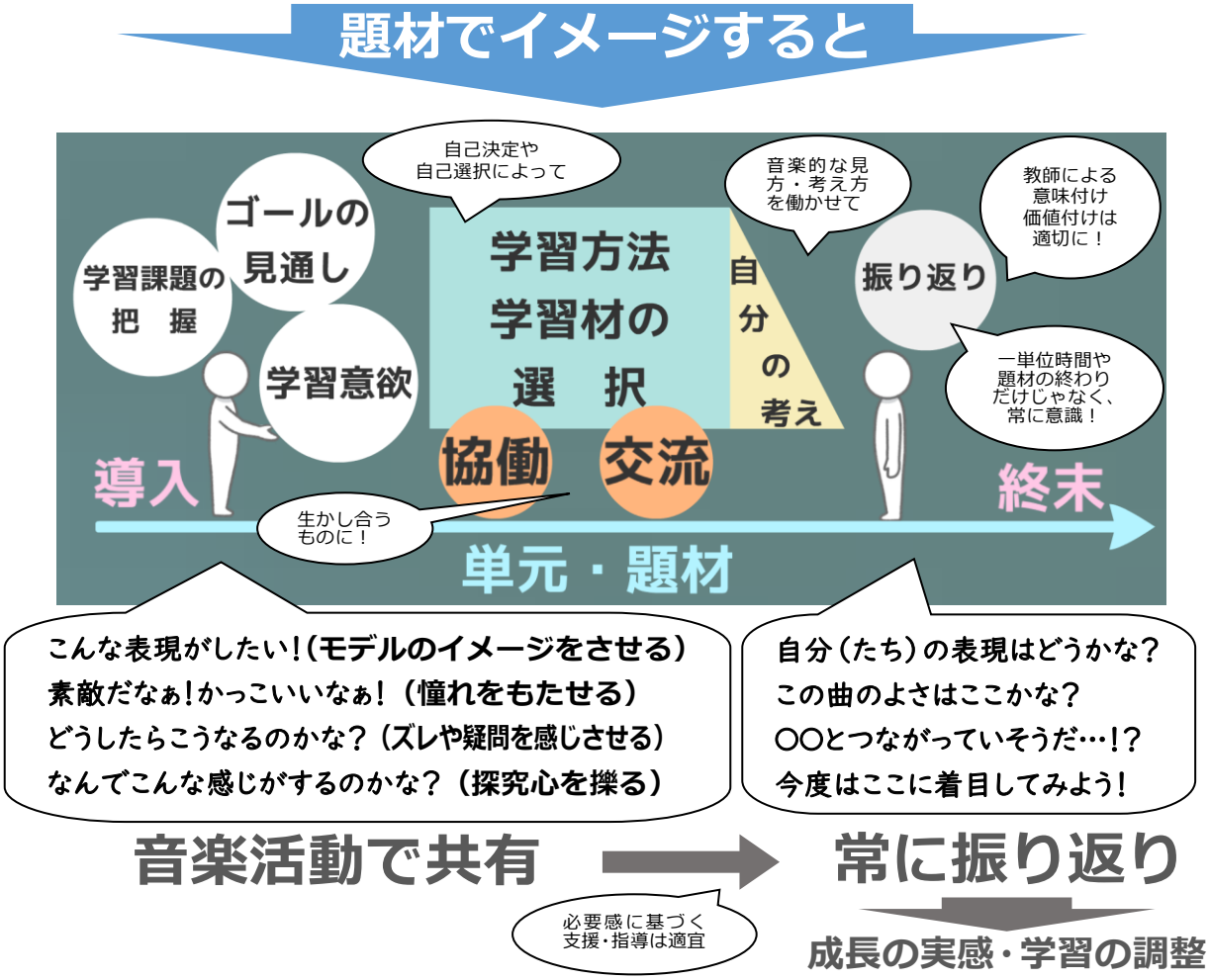
① **児童の学習の改善**につながるものにしていくこと
② **教師の指導の改善**につながるものにしていくこと
③ これまで当たり前のように行われてきたことでも、
「**本当に必要かな？ふさわしいかな？**」という見直しをしていくこと

教師の目指す子供の姿と子供が目指したい自分の姿が共有されると子供たちの学びはより主体的になっていきます。

４　学習者主体の授業



小学校における課題として「音楽の授業＝学校行事における発表のための練習の時間」となっている現状があります。動機づけとして意味をもつこともありますが、そのために教師が一方的に「教え込む」指導に終始していることは大変残念なことであり、学習者主体の授業とはなり得ません。こういった現状を改善するためにも、「目指すゴールを教師と児童で共有する」ことが必要となります。児童はゴールのイメージができてはじめて、そこを目指そうとする「今の自分はどうだろうか？」という意識が生まれます。これが学びにおいてメタ認知や自己選択、自己決定を促し、主体性を引き出します。この時、共有が丁寧に行われていると、教師の支援や指導は子供の「伸びたい」に沿ったものになり、「一方的な指導」や「教え込み」にはならないはずです。ここで参考になるのが、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の視点です。これを参考にして、授業デザインを練ると良いです。



子供が目指したいゴール（方向）をイメージできていると、粘り強く取り組んだり、自己を振り返って学習の調整をしたりできるようになります。音楽科の問題解決は自身の資質・能力を見つめることを求めています。ですから、題材の導入で、いかに音楽活動を通してそのゴールをイメージし、自身の資質・能力と向き合うことができるかが大事なポイントになります。

5　音楽科の観点別学習状況の評価の観点

小学校では今年度より学習指導要領の全面実施となりましたが、子供たちの資質・能力を見取るための観点別学習状況の評価の観点はどのように整理されたのか改めて確認しましょう。

＜平成２０年改訂における共通の考え方＞

関心･意欲･態度	思考･判断･表現	技能	知識･理解

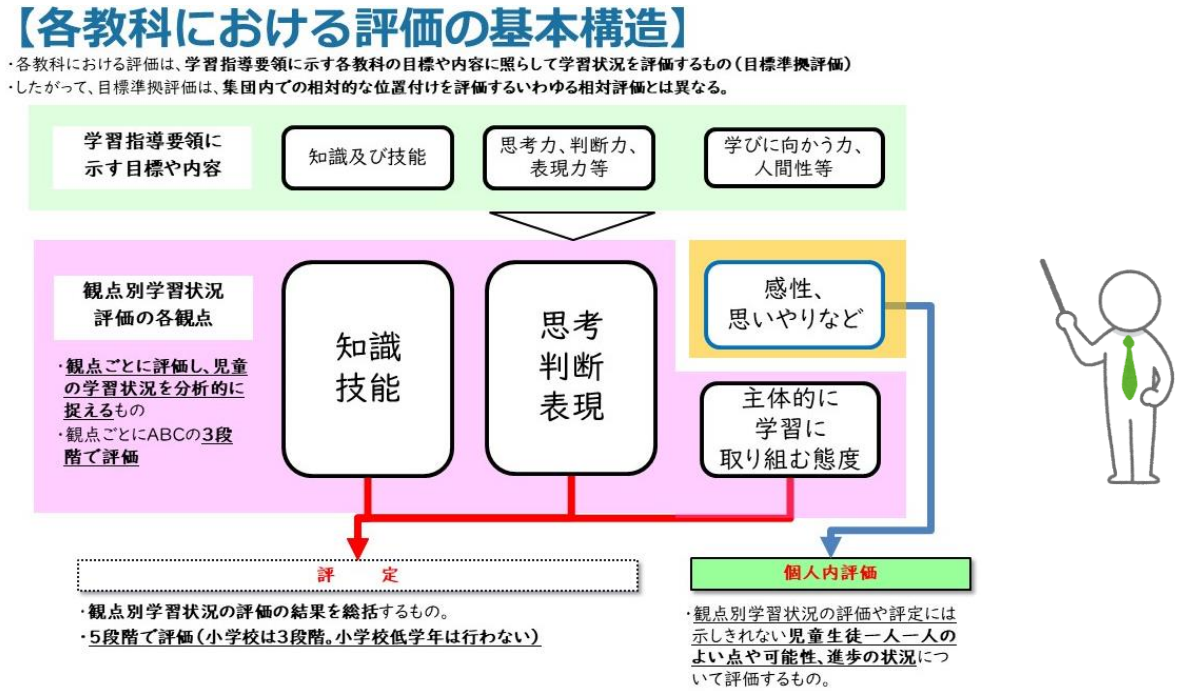
＜平成２０年改訂における音楽科の考え方＞

関心･意欲･態度	**音楽表現の創意工夫**	**音楽表現の技能**	**鑑賞の能力**

＜平成２９年改訂＞

知識･技能	**思考･判断･表現**	**主体的に学習に取り組む態度**
･曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解している。 ･表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付け、歌ったり、演奏したり、音楽をつくったりしている。	音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、どのように表すかについて思いや意図をもったり、曲や演奏のよさなどを見いだし、音楽を味わって聴いたりしている。	音や音楽に親しむことができるよう、音楽活動を楽しみながら主体的･協働的に表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。 三つとも、各目標の（１）の項目に対応（「主体的に～」のみ，学年の目標からの対応）

各評価の観点の趣旨は基本的には目標の（１）に対応しています。これは「何ができるようになるか」までを見通して今回の改訂が行われたからです。この点の整理ができていると、子供たちが目指すゴールへ向けて、どこをさらに伸ばしていくとよいのかという的確な支援や手立てが行えるようになります。音楽科では音楽に対する感性を働かせることは学習としての成立条件であり、児童がそれを働かせているかどうかを評価する性格のものではないことにも以下の基本構造を踏まえて注意が必要です。



6　観点別学習状況の評価の観点を踏まえた児童の見取り

三つの「資質・能力」で生徒の実態を把握しましょう。具体的には以下のように、音楽科の「目標」に基づいて考えると各資質・能力の違いが分かりやすいと考えます。児童の見取りができるということは**「学習評価」の第一歩**です。観点ごとにどのような資質・能力について見取る必要があるのかを理解しておく必要があります。

○　知識

・曲想と音楽の構造などとの関わりについてどのくらい理解（どのような理解を）しているか？

「構造など」には歌唱における「歌詞の内容」を含んでいますが、歌詞の語句や語彙だけを捉えた知識ではなく、音楽の曲想との関わりについての理解ですので注意しましょう！

○　技能

・思いや意図を表す音楽表現をするために必要な技能をどのくらい（どのように）身に付けていて、それを歌唱・器楽・音楽づくりで表すことができているか？

技能は児童が「こんな表現をしたい」という「思いや意図を」もっていて、それを表現するために必要となっていることが大事です。児童が必要ともしていないのに先生が教え込むということは、児童にとっては必要感のないことをさせられていることになります。つまり、「思考力，判断力，表現力等」との結び付きが強いということですね。

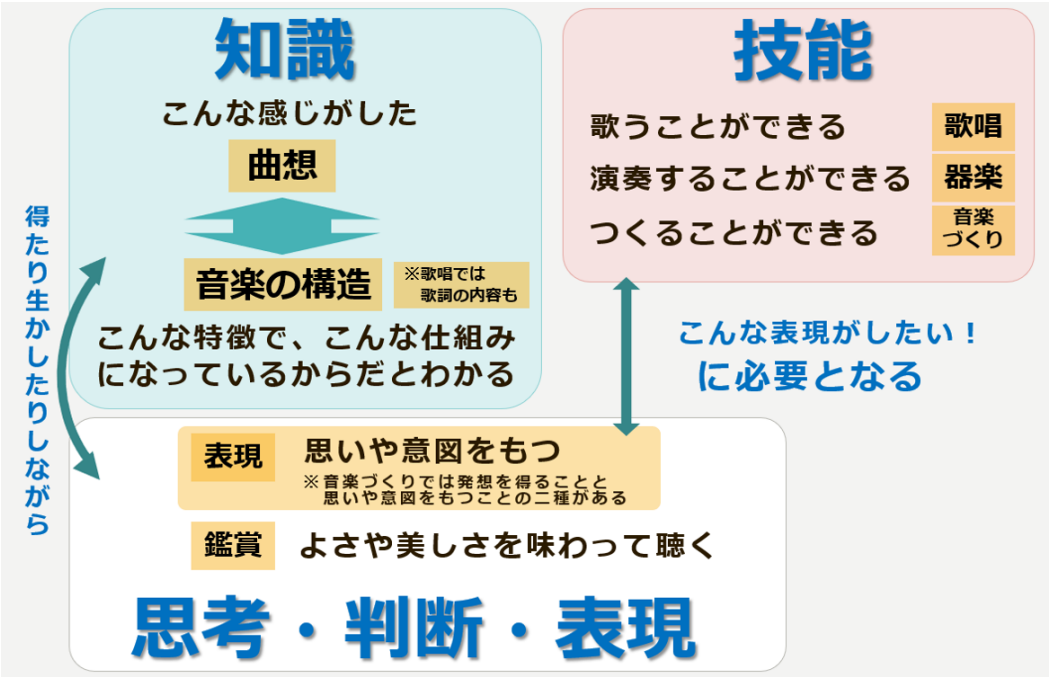
○　思考力，判断力，表現力等

・表現についてはどのような「思いや意図をもつこと」ができているか？

・鑑賞では「よさや美しさを味わって聴く」ことができているか？

ちなみに、「音楽づくり」では、即興的に表現することを通して音楽づくりの発想を得ることと、音を音楽へと構成することを通して、思いや意図をもつこと、の２種類がありますので注意してください。子供が聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えることで、このような思考力，判断力，表現力等は深まっていきます。

【知識・技能，思考力，判断力，表現力等の見取りのポイント】



○　学びに向かう力，人間性等（評価はその内の「主体的に学習に取り組む態度」）

・音や音楽に親しむことができるよう、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしているか？「学びに向かう力，人間性等」の中には「思いやりや感性」などといった観点別学習状況の評価や評定にはなじまないものも含んでいるため、学習を通じて見取ることができる部分についての実態を見つめましょう。

7　観点別学習状況の評価の観点を踏まえた評価の具体

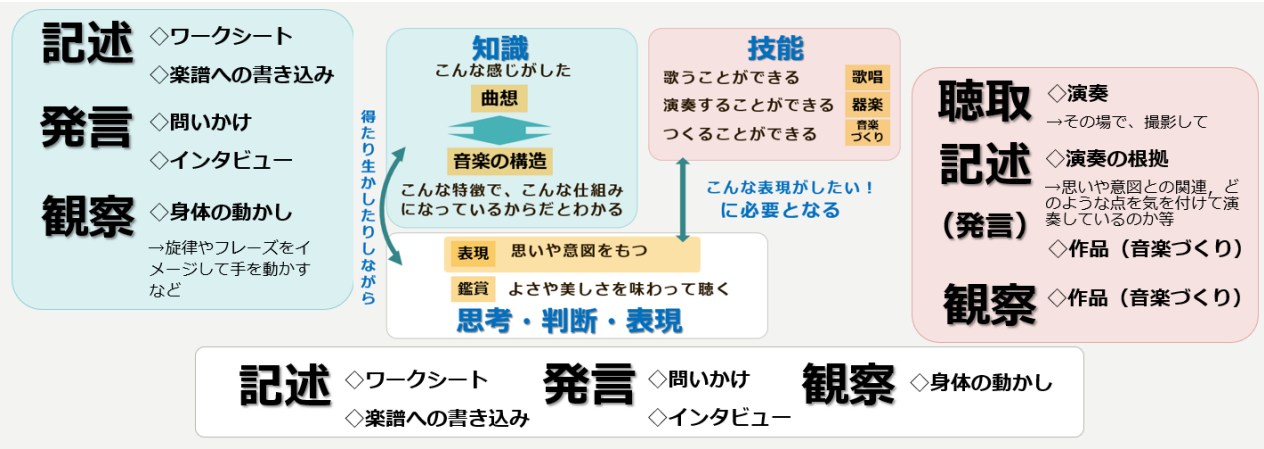
以下三つの観点における評価の具体について確認していきましょう。当然、総括的な評価のみではなく、題材の授業の中で指導に生かす形成的な評価が大事です。「指導と評価の一体化」とはつまり、指導したことについての評価ですので、自分が指導もしていないことについて児童を値踏みするような評価は求められていませんので気を付けましょう。

○　知識・技能

「知識」については、「曲想と音楽の構造との関わり」について、どのように理解しているのか、ワークシートへ言葉や文で説明する記述であったり、楽譜などに音楽を形づくっている要素の働きが分かるような書き込み（例えば、線や矢印で関係を表していたり等、図形や記号などをつかって説明していたり等です）をしていたりするもので見取ることができます。評価において、「知識」だけでなく注意したい点は、書く（書かせる）ことにこだわりすぎると、そこにはまた異なる資質・能力も必要となってきますので、本来の子供の音楽的な資質・能力が見取れなくなる可能性があることです。先生からの問いかけやインタビューにどのように発言するか、旋律やフレーズをどう捉えているかを体で動いて表すなど、「話し言葉や行動・様相」による見取りも工夫してみましょう。授業中に見取るものと、授業後に見取るものを効果的に使い分けると良いと思います。

「技能」については、実際に演奏するための技能を身に付けているのか、その場で、また撮影などして聴き取ることが考えられます。しかし、ただ演奏しているところだけを聴き取ってもなかなか判断しにくいところもあります。それは、思考・判断・表現である「思いや意図」とどのように関連しているのか、また例えば音色や響きをどのように気を付けようとして演奏しているのか、などを記述したり発言したりしているものと関連させて総合的に評価することが必要です。さらに、注意したい点ですが、「音楽づくり」では、音楽を「つくる」技能が求められていますので、実際につくった作品をその場で本人が演奏することができなくても良いということです。それは「器楽」としての演奏する技能であり、異なる質の資質・能力です。

【知識・技能，思考力，判断力，表現力等の見取りの具体】



○　思考・判断・表現

「思考・判断・表現」ですが、表現領域では思いや意図をもつことですので、どのような思いや意図をもっているのか、記述・発言で見取ったり、体の動き（指揮やダンス・自由な動作等）でそれを表しているものを見取ったりすることが考えられます。ここでも注意したい点は、どのように演奏したい（つくりたい）のか、音楽を形づくっている要素の働きから考えることを求めていますので、それを実際に演奏することができるかどうかは、「技能」の資質・能力であり、質が異なっているという点です。必ずしも考えた思いや意図についてその場で本人が演奏できなくてもよいということをおさえておきましょう。

○　主体的に学習に取り組む態度

各教科等の「主体的に学習に取り組む態度」に係る観点の趣旨に照らして，以下の２つの側面について評価するとあります。音楽科における授業の具体（表現領域器楽分野のリコーダーを用いた授業）で考えてみましょう。

①　知識及び技能を獲得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面。

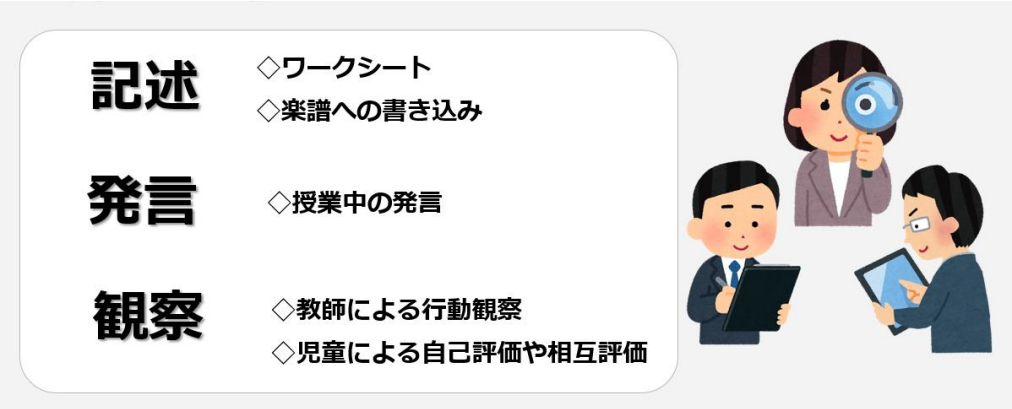
①については、リコーダーの演奏そのものや奏法や音色など、または演奏している音楽の特徴に興味をもって、例えば「滑らかに」演奏するために何度も何度も練習をし続けている様相がある、といった姿です。

②　①の粘り強い取組を行う中で，自らの学習を調整しようとする側面。

②では、何度も練習し続けてもやっぱりうまくいかないので、友達に「どうしたらいいかなぁ？」とポイントを尋ねたり、教科書を見直して、注意点を参考にしたりして、解決方法を変更しようとしている様相がある、といった姿です。

上記の例では、どちらも単にひたすらやっている、単に色々やり方を変えているということだけではなく、音楽科の特質に応じたねらいに向ってそのような様相が表れていることが必要です。また、これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々ではなく、相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられます。ですから、実際の評価の場面では、双方の側面を一体的に見取ることが想定されます。例えば、自らの学習を全く調整しようとせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は、一般的ではないと考えましょう。

【主体的に学習に取り組む態度の見取りの具体】



評価の方法としては、「記述」や「発言」、「観察」などが考えられます。これらを関連付けながら総合的に検討し、観点別の学習状況を記録に残すことにつなげることが大事です。評価材料が多いということは、それだけ評価の客観性や妥当性が高まるということです。また、現実的に考えると、授業の中で評価しなくてはいけない（観察や発言）ことと、授業後に評価できること（記述）とのバランスを考えることも大事です。これからは特に ICT の活用も効果的だと思いますので、色々試しながらチャレンジしていきましょう

8　観点別学習状況の評価の観点について音楽科における注意点

ここまで、各資質・能力について、また各観点別学習状況の評価の観点について見てきましたが、音楽科において特に注意したい点について整理しておきますので、是非確認しておきましょう。

知識・技能

<評価の内容>	<評価の工夫（例）>
◇ **個別の知識及び技能の習得状況**について評価する。 ◇ それらを既有の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、**概念等として理解したり、技能を習得したりしているか**について評価する。	○ ペーパーテストにおいて、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮する。 ○ 実際に知識や技能を用いる場面を設ける。

技能については、「思いや意図を表現するための技能」が身に付いているかを評価するため、単に演奏技術を見取るのではなく、児童生徒の思いや意図が具現化されているかを見取る教師の評価力量が必要。

音楽科で求める知識と技能は、音楽表現を楽しんだり、思いや意図を表現したりするためのものであるため、ペーパーテストのみの評価でなく、活動の中で評価していくことが必要。

思考・判断・表現

<評価の内容>	<評価の工夫（例）>
◇ 各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価する。	○ 論述やレポートの作成、発表、グループでの話合い、作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れる。 ○ 学習過程で思考したことや判断したことが、表現される音や音楽、言葉等と整合しているかを、発言やワークシート等によって慎重に評価する。 ○ ポートフォリオを活用する。

音楽科における「思考力、判断力、表現力等」は、知識や技能を得たり生かしたりしながら培っていくもの。音楽科で求める「思考力、判断力、表現力等」は、音楽を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにするためのものである。したがって、指導においては「知識及び技能」と一体化させ、評価においては下記の事柄について思考、判断、表現ができているかを評価することがポイントとなる。

思考する事柄は、「音楽を形づくっている要素の働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったことの関わりなど」である。

判断する事柄は、「思考を通して得られる思いや意図、自分にとっての価値など」である。

表現力等とは、思考したことや判断したことを「音や音楽、言葉などで表すことができる力」のことである。

主体的に学習に取り組む態度

<評価の内容>	<評価の工夫（例）>
◇ 音や音楽に親しむことができるよう、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。 ◇ 粘り強く学習に取り組む態度と自ら学習を調整しようとしている態度の両方を把握 ◇ 「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で評価を行う。	※「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で ○ 授業中の発言 ○ 教師による行動観察 ○ ノートやレポートにおける記述

「音や音楽に親しむことができるよう」は、主体的に学習に取り組む態度における音楽科の学習の目指す方向性を示しているものであるため、評価規準としては設定しない。（※楽しんでいるかどうかを評価するのではないということ）

評価対象は、

音楽活動を楽しんでい　**ながら**　主体的・協働的に学習に取り組もうとしているか

この二つが「ながら」でつながれているところがポイント！
「音楽だから楽しいことこそが重要」と「教科としての学習なのだから学びが重要」が対立するものではなく、「ながら」を介して二つの観念を融合させることが重要である。また、そのために主体的・協働的に取り組む授業を展開させていくことが大切である。

しかし、全ての活動をグループで行ったり、音楽の学習は全て協働的な学びの場であるといった考え方をもったりすることには問題がある。大切なのは、多様な表現の仕方、自分とは違った表現を知るために、協働的な場を仕組むことである。

児童が自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められている。

（答申より）

9　思考・判断のよりどころを生かした題材のまとまり

例）題材のまとまりの評価基準　A 表現（I）歌唱の例

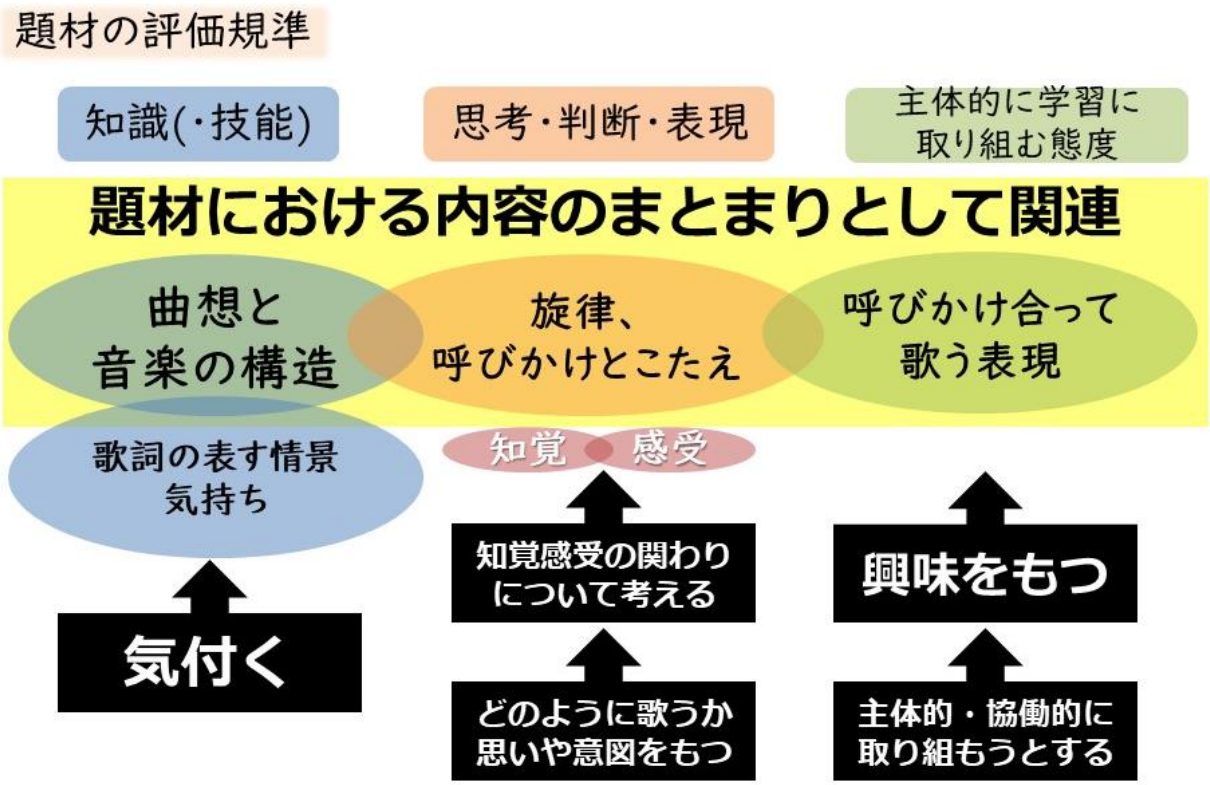
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
＜事項イ（ア），ウ（イ）＞	＜事項ア＞	
・曲想と**音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わり**について気付いている。 ・思いに合った表現をするために必要な、範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能を身に付けて歌っている。	**「旋律、呼びかけとこたえ」**を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもっている。	**呼びかけ合って歌う表現**に興味をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。

題材における内容のまとまりとして関連していること！

思考・判断の拠り所となる主な音楽を形づくっている要素を**適切に選択することができれば、子供たちは、資質・能力をバランスよく伸ばしていくことができますね！**

※「音楽の構造」とは！？
　構造（国語科でいう段落構成のような）のみを詳細に捉えるのではなく、**思考・判断の拠り所として選択した音楽を形づくっている要素**との関わりの中で捉えていくことのできるもののことである

キーワードでまとめると



国立教育政策研究所教育課程研究センターより発行されている『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』小学校音楽には、題材のまとまりに基づいたいくつかの評価の事例が掲載されています。そのうちの事例１に「とんび（歌唱）」と「エーデルワイス（器楽）」を関連させた題材があります。一見、歌唱することとリコーダーを演奏することで全く異なる知識や技能が必要だと考えてしまうかもしれませんが、下記の楽譜のように、「旋律の音型」や「リズムの変化」などから、２つの曲は大変近い構造をもった曲だと言えます。つまり、この２つの分野で取り扱う２曲では同じ知識の理解をねらっています。ですから、歌唱における知識、器楽における知識と分けては考えずに、共通に発揮される知識として習得をねらっていくということになります。（事例では歌唱で得た知識に基づいて器楽で生かしていく展開となっています。）こういった事例からも分かるように、題材のまとまりには、「思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素」を適切に選択する（絞る）ことが肝要です。

この２曲を取り上げても、

旋律とリズム

呼びかけとこたえ

反復と変化

のように、「思考・判断のよりどころとなる音楽を形づくっている要素」はいくつかの選択が考えられます。このことは、子供が表現や鑑賞をする際に、沢山の引き出しをもっているということとしても考えられます。ですから、「一体どの引き出しを開けたらいいの？」という子供たちに対して、題材としてねらうよりどころを適切に選択することはとても大事です。

とんび

フレーズを大きく４つに分けた時、
３つ目のみ曲想が大きく変化しています

※ここには「とんび」の楽譜を掲載していました。
※教科書等で確認されてください。

エーデルワイス

フレーズを大きく４つに分けた時、
３つ目のみ曲想が大きく変化しています

※ここには「ｴｰﾃﾞﾙﾜｲｽ」の楽譜を掲載していました。
※教科書等で確認されてください。

１０　表現の授業改善　～教材研究からのアプローチ～

Point　曲想と音楽の構造との関わり（歌詞の内容も）を可視化する！
→　「思いや意図」をどのようにもたせるか？につながる「発問」が変わる
→　「思いや意図」が、技能につながる

　リズムの形（パターン）が三段目だけ異なっていることに気付くことができると思います。そこには作曲者の意図があることから、「では旋律はどうかな？」と旋律や歌詞の関わりについて考えていきましょう！フレーズを大きく４つに分けた時、３つ目のみ旋律の音型が異なっています。

※ここには「とんび」の楽譜を掲載していました。
※教科書等で確認されてください。

①旋律を線で結んでみましょう。
②指や手など身体を動かしてフレーズの動きをたどってみましょう。
③旋律の流れからどのようなことを感じますか？
などのアプローチで音型をつかむことができますね！

※ここには「とんび」の楽譜を掲載していました。
※教科書等で確認されてください。

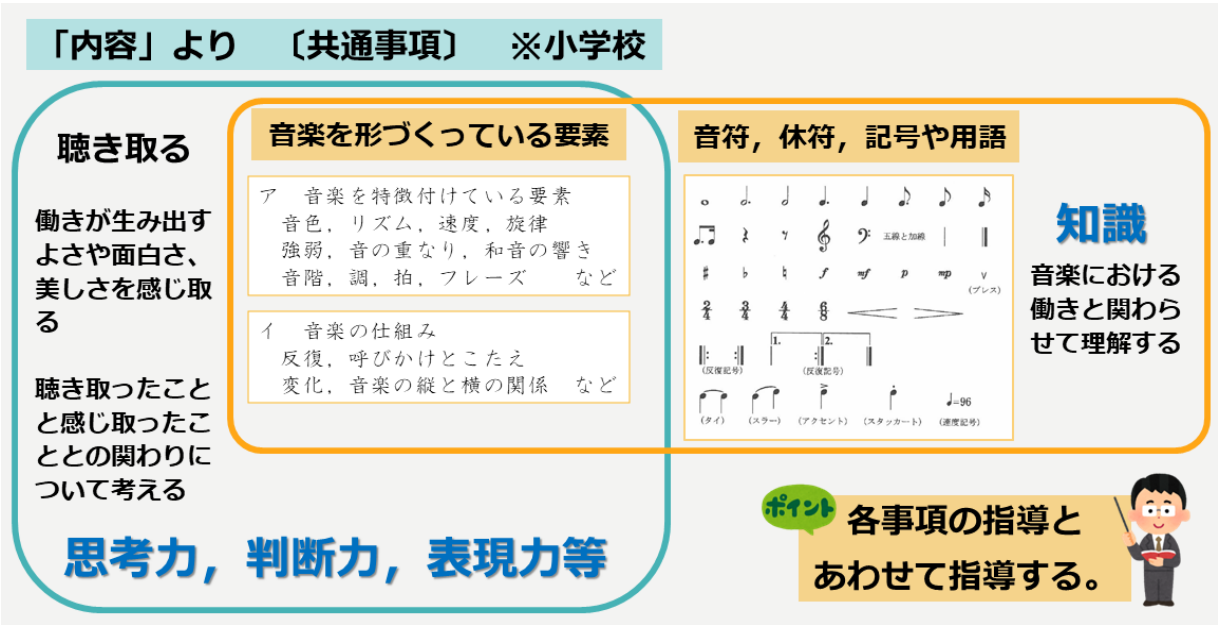
旋律が盛り上がっているところはどんな歌詞になっていますか？そこから作曲者がどんな情景を思い描いているのか想像してみましょう！

情景・視点・季節・時間などのようなことを子供たちから引き出しながら（教師の押し付けではなく）イメージをもたせていくことが大切です！

そのようにして「思いや意図」は膨らんでいきます！

※ここには「とんび」の歌詞を掲載していました。
※教科書等で確認されてください。

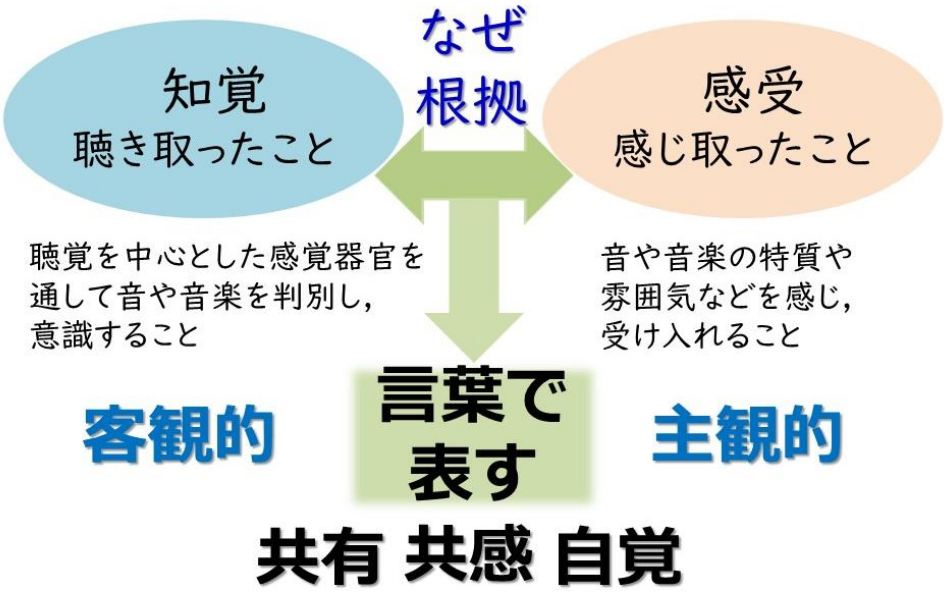
歌唱については、音楽の構造がどのようになっているのか、可視化することが大事です。児童が思いや意図をもち、膨らませていくために、聴き取ったことや感じ取ったとの関わりについて、音楽活動によって実感をもちながら、具体的な工夫や変化につなげていく材料となるのが、音楽を形づくっている要素です。旋律やリズム、拍や拍子など、基本的な音楽を形づくっている要素について理解しておくことが大切です。



１１　鑑賞の授業改善

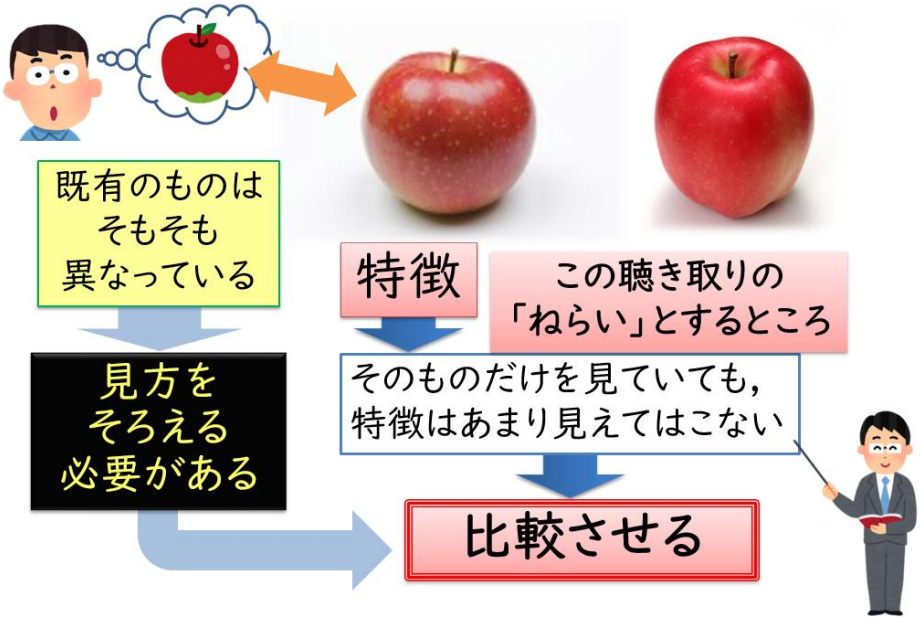
①　「聴き取り」と「感じ取り」からのアプローチ

Point　「聴き取り」と「感じ取り」の質の違いを、指導に生かす！



②　聴かせる際の手立てからのアプローチ

Point　比較による活動で，特徴を絞って聴き取っていくと，要素の働きや効果を感じ取ることができる。



◇　異なる楽曲を比較させる
　例）ホルスト作曲　組曲『惑星』から「木星」と「火星」を比較させる
◇　一つの楽曲の、異なる部分(場面)を比較させる
　例）ホルスト作曲　組曲『惑星』から「木星」の主題の前半と後半を比較させる

③　〔共通事項〕を踏まえたアプローチ

Point　「音楽のことば」の獲得は先生によるフィードバックで概念づける！

音楽のことば　＝　〔共通事項〕～音楽を形づくっている要素

後半で手の動きを変えたのはなぜですか？

なんかふわふわしていたのが、後半はかたい感じになったからです。

それは、柔らかい感じの音色が、後半でかたい感じの音色に変わったということですね？

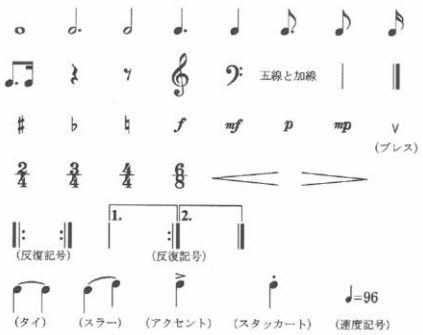
そうです！音色が変わるってそういうことなのか～。

繰り返し行うことで，
要素の概念的な捉えが習得される
→ 共 通 語 を増やす

児童は聴き取ったこと感じ取ったことをうまく言い表せません。教師がしっかりと意味付け・価値付けをしてあげましょう！

◇「資質・能力」としての〔共通事項〕の位置付けについて

〔共通事項〕　＝　**表現及び鑑賞の学習において必要となる資質・能力**

① 音楽を形づくっている要素 〔思考力・判断力・表現力等〕	② 音符，休符，記号や用語 〔知識〕
ア 音楽を特徴付けている要素 音色，リズム，速度，旋律 強弱，音の重なり，和音の響き 音階，調，拍，フレーズ など	
イ 音楽の仕組み 反復，呼びかけとこたえ 変化，音楽の縦と横の関係 など	

各事項の指導と併せて指導する
↓
単独で指導しない

④　「書く力」へのアプローチ

Point　この授業でどのような力をつけさせることをねらっているのか確認！

◇ いわゆる「書く力」まで汎用的に求めているのか？

◇ ねらっていることが、曲想と構造の理解などで、それが知覚・感受により、促されているのか評価したいのであれば、

→該当児童生徒の特性に応じて、表現できる方法でアウトプットさせる

例）・キーワードは提示して、文を作らせる、構造的につながせる

・発言（口述）させる（聞き取りを行う）

参考資料

◇　NITS　独立行政法人教職員支援機構 校内研修シリーズ 新学習指導要領編 No18「小学校学習指導要領　音楽科　改訂のポイント」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官津田正之氏による小学校学習指導要領音楽科の改訂のポイントについての解説です。

【NITS ホームページ　校内研修シリーズ「小学校　音楽科の改訂のポイント」　アドレス】

https://www.nits.go.jp/materials/youryou/018.html

【NITS ホームページ　校内研修シリーズ「小学校　音楽科の改訂のポイント」　QR コード】

◇　NITS　独立行政法人教職員支援機構　校内研修シリーズ No35「言語活動」（中学校音楽科，高等学校芸術科 音楽）

文部科学省教育課程課教科調査官臼井学氏による中学校音楽・高校芸術科を中心とした、言語活動の充実と配慮事項についての解説です。内容としては中学校、高等学校の学習内容を扱っていますが、「音楽科の特質に応じた言語活動」についてのイメージをもつために大変参考になりますので、是非ご覧ください。

【NITS ホームページ　校内研修シリーズ「言語活動」　アドレス】

https://www.nits.go.jp/materials/intramural/035.html

【NITS ホームページ　校内研修シリーズ　言語活動　QR コード】

◇　音楽科授業工房福岡　web サイト

「音楽科授業工房福岡」は学校に１人しかいない音楽科の先生方のために、授業づくりに役に立つ資料や情報の提供を行っています。

【音楽科授業工房福岡　ホームページ】

https://kobo-fukuoka.com/

【音楽科授業工房福岡　web サイト　QR コード】